Akita University

職場で担当者とALTとの間に現れる話題†
－教育委員会と学校を対象にしたニーズ調査より－

佐藤　雅彦*
秋田大学国際交流センター非常勤講師
宮本　律子**
秋田大学教育文化学部

本稿は，教育委員会および学校の担当者とALTとの間によく現れる話題を考察したものである．

担当者からニーズ調査を通して得られた話題のリストは，教育委員会が世話役のような立場から，そして学校が同僚としての立場からALTに接する傾向にあることを示唆している．この傾向は担当者によりその存在が認められた．また，リスト上の話題が職場でよく現れることも確認されたため，このリストは日本語指導に役立つものである．

なお，リスト上の話題を日本語指導に用いる際には，その話題が持ち出される目的を複数設定することが望ましいのに加え，同目的に反映させるものに担当者がALTに対して示す接し方の傾向とそれ以外のものの両方が含まれることが望ましい．

キーワード：日本語教育，ALT（外国語指導助手），話題，専門日本語教育

1　はじめに

教育委員会（以下，教委）および学校とそこに勤務するALTの間には，日本語によるコミュニケーションへの不安や不満[1]がうかがえる．その軽減を目的として，筆者は職場（教委・学校[2]）の担当者がALTに最低限理解してほしいとする職場の語句を佐藤（2012）で調査，報告した．本稿では，語句に続くものとして，職場の担当者がALTと話す際によく現れる話題について考察する．どんな話題が職場でよく現れるか，それらの話題はどんな目的のために現れるのかを情報として整理すると，職場で求められる日本語をALTに指導する際のシラバスおよび教材作成のリソースとして活用でき，不安軽減の助けになるものと期待できる．

非日本語母語話者を受け入れる側を調査対象としたニーズ研究には，札野・辻村（2006）がある．これは大学生に期待される日本語コミュニケーション能力に関し，その受け入れ側である大学の教員を対象として詳細な調査を行ったものである．この研究は，その調査対象を受け入れ側としている点で本研究と共通するものがあるが，ALTに関するものではない．JETプログラム参加者に関わる日本語ニーズについての研究には，前田他（1999）などがあるが，これはJETプログラム参加者つまり学習者を調査対象としたものである．このように，ニーズについての研究はあるものの，ALTの受け入れ側を対象にした研究は現在までほとんど見当たらない．

本稿は，これまでのニーズ調査で得た話題のリストが示唆すること，同リストのリソースとしての妥当性，話題を用いた指導の留意点について考えることを目的とする．

2012年２月15日受理
†Common Topics Between Japanese Supervisors And ALTs In The Workplace
*Masahiko SATO, Adjunct Instructor of Japanese As a Second Language, Akita University International Exchange Center
**Ritsuko MIYAMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

Akita University

2　調査方法

調査は，ニーズ調査で得た話題（データ1）を整理し，続いてそこで得られることに関する調査（データ2）を行うかたちで実施した．

データ1は，筆者が代表を務める日本語集中講座[3]で，ALT担当者を対象に実施した2002～2011年のニーズ調査（有効回答総数110）を通して得られたものである．ただし，2004年のデータは紛失したため，この中に含まれていない．ニーズ調査は，質問紙への自由記述を主とした．主な質問内容は，多く話す話題・内容のほか，話すための時間の有無，最低限理解しておいてほしい語句・マナー，講座参加者（JET青年）と担当者が話す時間帯，どんなときに言葉の障壁を感じるかなどである．この中で利用したのは，担当者がALTと多く話す話題・内容に関する回答（自由記述）である．

データ2は，データ1の結果に関する質問紙調査（当てはまる選択肢を選ぶ形が主）とその回答確認や詳細を尋ねるためのインタビューで得た．対象者はこれまで所属するALTが夏期日本語集中講座に参加したことのある教育委員会および学校の現ALT担当者である[4]．

3　データ1（ニーズ調査）の結果

以下ではデータ1を用い、職場でよく出る話題とその示唆することについて考える。

3.1.　教育委員会でよく出る話題

まず，ニーズ調査で教育委員会から挙げられた話題を，多いものから順に示す．

上位は，「生活・困りごと・健康[5]」に関するもの，「今週・今日の予定」，「趣味」「週末・休日の過ごし方」，「学校訪問・授業の打ち合わせ」，「学校・児童生徒の様子」，「事務的なこと」，「自国・日本のこと」

表1　教委から挙げられた話題すべて

教委の話題				
生活・困りごと・健康	45		ニュース	4
今週・今日の予定	43		雑談	2
趣味	31		日本・秋田の観光地	2
週末・休日の過ごし方	21		ALTからの質問	2
学校訪問・授業の打ち合わせ	16		勤務先の町	2
学校・児童生徒の様子	16		日常生活の中の行事（イベント・祭りなど）	2
事務的なこと	15		英語	1
自国・日本のこと	11		この日本語講座について	1
年次休暇関係	6		研修について	1
日本語	6		会議の内容	1
食べ物	5		心構え	1
家族・友人	5		（表中のグレーは多いものを示す）	

[1] ニーズ調査用紙に以下のようなものが見られる．
自分達が英語で話せないことを痛感します．日本語を話せるようになってほしいと思っておりますが，日本語を聞き取れるようにもなってほしいです．／私達もできるだけ英語と日本語をおりまぜて説明していますが，伝わっているのかいないのか，よくわかりません．／常に（接していて言葉の障壁を感じる）．／担当者であるが，英会話はできず，片言の英単語をつなげながらどうにか伝えている状態で，常に障壁を感じているのが現状である．／（ALTが）病気になった時（言葉の障壁を感じる）．
Q.どのようなときにコミュニケーションに困難を覚えますか　All the time. When a conversation progresses beyond hello, my name is... ／ Always. I have no Japanese. ／ At the bank, at school. ／ All the time. I don't understand the language very well, and no one speaks English in my town. ／ Everywhere!
Q.安心するため，職場でどのような情報を得たいと思いますか　The schedule, if there are any important events or meetings happening. ／ Understanding what is happening. など．
[2] 学校に関し，職場は職員室を指すものとする．これは，生徒と接する教室や廊下などでは基本的に英語を話すことが期待されるためである．
[3] 正式名称は秋田県におけるJET参加者のための日本語夏期集中講座．現在までの参加者総数は256名．4レベルに分かれて4日間（総計22時間程度）行う．

Akita University

と続く．教育委員会の担当者が教師として教室に出向き，ALTと一緒に教えるのが一般的ではないことを考えると，これらの話題は仕事のマネジメント面や，ALTの生活面・心理面などに焦点を当てた会話をするために出されるものと思われる．そこから，教委は，相談役・世話役のような役割に立ってALTに接する傾向にあると考えられる．

このほか，表からは，多くの教委においてまず確実に出ると思われる話題が「生活・困りごと・健康」，「今週・今日の予定」，「趣味」などであることがうかがえる．そして，仕事に関連したものとしては，「学校訪問・授業の打ち合わせ」，「学校・児童生徒の様子」，「事務的なこと」が，「今週・今日の予定」以外によく出ると言える．生活面などとの関連が高いと思われるものとしては，「生活・困りごと・健康」と「趣味」に「週末・休日の過ごし方」，「自国・日本のこと」が見られる．この結果からはほかに，「趣味」と同様にごく一般的な話題だと思われる「食べ物」，「家族・友人」があまりとりあげられないこともわかる．

以上から，教委において特によく出る話題は10に満たず，その内容は仕事に関連したものと生活に関連したものがそれぞれ半数程度あるものと考えられる．

なお，このデータにおいて一つしか挙げられていないものの中には，背景説明がないため挙げた本人以外には意味や内容が想像しにくいものがいくつか見受けられる．「この日本語講座について」，「研修について」，「会議の内容」，「心構え」である．これらは，質問紙調査（データ２の調査）を行う際，回答者の混乱をさける目的から用いなかった．

3.2. 学校でよく出る話題

同様に，学校から挙げられた話題について考える．「授業の打ち合わせ」，「今週・今日の予定」が最上位に見られる．ともに教育委員会でも見られる話題であるが，その性質は教育委員会とは異なり，ALTを教員と見なして接するため生じる話題であると考えることができる．理由として以下のようなことが考えられる．教委ではこれらの話題が，学校訪問時のふるまい方や訪問先の小学校の教諭との打

表２　学校から挙げられた話題すべて

学校の話題				
授業の打ち合わせ	39		毎日の食事	1
今週・今日の予定	32		ALTからの質問	1
自国・日本のこと	22		評価について	1
週末・休日の過ごし方	18		学校の特徴	1
生活・困りごと・健康	13		校舎の様子	1
生徒の様子	11		旅行	1
趣味	9		天気	1
事務的なこと	8		国際情勢	1
ニュース	7		他のALTの近況	1
家族・友人	4		個人的な旅行の手続き	1
食べ物	3		ファッション	1
日本語	3		ALTの飲み会	1
テレビ	3		（表中のグレーは多いものを示す）	
英語の表現や使い方	2			
英語教育	2			
雑談	2			

[4] 教委６名，中学校３名，高校１名の計10名，2011年10月23日現在．

[5]「生活・困りごと・健康」とくくりが大きいのは，回答に以下のようなものが見られ，まとめた方がいいと判断したためである．「生活の中で支障になる点について」，「生活面での支援」，「私生活での相談」，「私生活のこと（生活していく上で必要なこと）」，「プライベートあらゆること」，「生活，健康に関すること」．

Akita University

ち合わせについての情報提供を意味したり，この日は○中学校，この日は教育委員会勤務といった予定の把握を助けたりするものと思われるのに対して，学校のそれは，この日の午前は１年生とグリーティングカードを作る活動をしてほしい，午後は２年生の教室でこの文法項目を指導するから，導入時のスキットを一緒に行ってほしい，項目に見合った教室活動も考えてほしいというように，実際的指導と密接に結びついたものと考えられるからである．それに続く「自国・日本のこと」，「週末・休日の過ごし方」は教委同様，仕事よりも生活面との関連が深いと思われるが，そのあとにはまた仕事に焦点を当てた話題（「生徒の様子」，「事務的なこと」）が続いている．そのため，話題の多くはALTを教員と見なす視点から出されると考えられる．以上より，学校は，教員として働くことを期待してALTに接する傾向にあると考えられる．また，「生活・困りごと・健康」がある程度見られることからは，教委ほどではないものの，ALTに対して相談役・世話役のような立場から接する場合もあることがうかがえる．

このほか，表からは，頻出の話題数が学校でも少数にとどまるものであり，その内訳が仕事関係と生活関係がそれぞれ半数程度であることもわかる．また，「家族・友人」や「食べ物」はここでもあまり取り上げられない．若干出現頻度が高いものとしては，「趣味」，「ニュース」が見られる．

4　データ２（質問紙・インタビュー）の結果

以下では，データ１を通して得られたことについて，データ２を用いて考える．

4.1．ALT担当者の接し方と話題

教委および学校の担当者は，自身のALTへの接し方をそれぞれ以下のようにとらえている．教委は５人全員[6]が「相談役・世話役のような役割に立ってALTに接する」場合が多いとし，学校では４人中３人が「教員・教員に準ずる存在として働くことを期待してALTに接する」場合が多いとしている．残りの１人は「相談役・世話役のような役割に立ってALTに接する」を選択し，以下を理由に挙げた．ALTと接する時間が教育委員会の担当者よりも長い，英語教師である自身が世話をすることもあるからというものである．これは地域などにより異なるものと考えられるが，学校での接し方に違いが見られる場合の理由の一つとして覚えておきたい．

教育委員会では相談役・世話役のような役割に立つ傾向，学校においては教員・教員に準ずる存在として働くことを期待する傾向にあるとする見方がほとんどを占めている．これは，話題から想像される接し方が，職場の担当者自身が考える接し方と重なっていることを示している．

次に，自身のALTへの接し方と職場で出される話題に関連があると考えているかを見る．多く挙げられたものから順に並べた話題のリスト[7]を示し，リストの話題が担当者自身のALTへの接し方を反映しているか尋ねたところ，教委（５人）も学校（４人）も全員が反映しているとした．これは，話題から想像される接し方と，話題と実際の接し方の関係が重なることを意味する．そのため，3.1および3.2で論じた，話題が示唆する担当者の接し方の傾向は，教委・学校ともに支持される．なお同様の傾向は，筆者が語句に関して行った調査（佐藤2012）でも見られる．

4.2．リストの話題の妥当性

続いて，同じリストの話題が職場においてALTとの間でよく出る話題の大枠をカバーしていると思うか尋ねたところ，教委（６人）も学校（４人）も全員が思うとした．この結果は，リストの話題が教委と学校で実際によく出るものであり，日本語指導のデータとして有効であることを示唆している．そのため，話題をシラバスにするときや，各現場を場面とした会話教材を作成するときに，その妥当性が認められる語句リスト（佐藤2012）と共に活用できるリソースであると言える．

5　共通する話題が示唆するもの

5.1．話題が持ち出されるときの目的からわかること

ところで，4.1で論じた教委と学校の接し方の傾向は，すべての話題において見られるのだろうか．双方に共通した話題に関し，それぞれどのような目的があるから持ち出されるのかについて教委と学校

[6] 教育委員会の回答が有効回答数より一つ少ないが，これは県教育委員会のALT担当者には回答できない質問だからである．県立高校に配置されたALTは県教育委員会所属だが，県教育委員会の担当者が彼らと直接接する機会は，市町村教育委員会の場合と異なりほとんどない．

[7] その話題が何度挙げられたかなどの数値は示していない．

Akita University

表3　教委（マス内左側）と学校（右側）に共通する話題とそれらが持ち出される目的

話題＼目的	ALTの現状や様子の把握	ALTへのカウンセリングやケア	さまざまなことがらの連絡	話しかけてALTに居場所を与える	仕事のスケジュール確認や調整	仕事の準備	＊学校や仕事の様子を探る	ALTに関わる事務について説明	英語・外国事情の学習	日本語・日本事情の学習支援	休暇の種類や取得の手順説明など	体調の確認や管理	有益と思われる情報の提供	世間話・息抜き	この話題は出ない	その他（自由記述）
生活・困りごと・健康	**4**/2	**4**/3	**2**/0	1/1	0/0	0/0	0/1	1/0	0/0	0/0	**2**/2	**5**/3	1/1	**4**/0	0/0	
今週・今日の予定	1/1	0/0	**2**/2	1/**2**	**3**/3	1/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/1	0/1	0/0	
趣味	0/**3**	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	1/0	**3**/3	0/0	
週末・休日の過ごし方	**2**/2	1/0	0/0	1/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/1	0/1	**4**/3	0/0	
＊学校訪問・授業の打ち合わせ[1]	0/0	0/0	**2**/1	0/1	**3**/2	**2**/4	0/0	1/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	1/0	
＊学校・児童生徒の様子	1/0	1/0	0/1	0/1	0/1	0/0	**5**/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/**2**	1/0	0/0	0/1
事務的なこと	0/0	0/0	**2**/2	0/0	1/**2**	0/0	0/0	**4**/2	0/0	0/0	1/1	0/1	1/0	0/0	1/0	
自国・日本のこと	0/1	0/1	1/0	0/**2**	0/0	0/0	0/1	0/0	**2**/3	**2**/1	0/0	0/0	**2**/1	**5**/2	0/0	
日本語	0/1	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1	**3**/2	0/0	0/0	1/1	0/0	0/0	
＊食べ物	1/**4**	0/1	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/**3**	**2**/2	**5**/4	0/0	
家族・友人	**2**/2	1/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	**3**/3	0/0	
ニュース	1/**2**	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1	0/0	0/0	0/0	1/1	**2**/3	1/0	
雑談	1/1	0/0	0/0	1/1	0/0	0/0	1/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/0	0/1	**3**/4	0/0	
ALTからの質問	1/0	1/1	1/1	0/0	1/**2**	1/0	0/0	1/0	0/0	0/0	**2**/0	0/0	0/1	0/0	0/0	
＊英語	0/0	0/0	0/0	0/0	1/0	0/**2**	0/0	0/0	**2**/7	0/1	0/0	0/0	0/1	1/0	0/0	

[1] ＊部分の学校での話題名は「授業の打ち合わせ」,「生徒の様子」,「食べ物」＋「毎日の食事」,「英語の表現や使い方」＋「英語教育」．また，目的は「ALTの仕事の様子を探る」．「英語」で有効回答数を超えた値が見られるのは，2つの話題を1つにまとめたため．

の担当者に尋ねたところ，表3のような結果が得られた．表中の目的は，挙げられた話題から想像されるものを筆者が考えて書き出したものである．いくつかの話題と目的についている＊は，その正確な名称が両者の間で若干異なっていることを意味する．これは調査の際，教委・学校それぞれに合わせた名称を用いたことによる．マス内の数字は，その目的を選択した人の数，そして太字は複数名が選択したことを意味する．

共通する話題は15ある．ほとんどの話題が複数の目的を持っていることから，話題を用いた日本語指導の際は，複数の目的や状況の想定が求められると考えられる．

生活・困りごと・健康（教委），学校訪問・授業の打ち合わせ（両者），学校・児童生徒の様子（教委），事務的なこと（両者），ALTからの質問（両者），英語（学校）などは，選択された目的の種類やその比重の示唆するところがそれぞれの傾向と重なる．その一方，今週・今日の予定（両者），家族・友人，ニュース，雑談のように，その話題を持ち出す目的に関し，教委と学校の間に大きな違いが見られないものもある．また，学校の話題の中には，他者である教委の傾向を示すものも見られる．生活・困りごと・健康，趣味，週末・休日の過ごし方，自国・日本のこと，日本語，食べ物などである．そのため，教委と学校の接し方の違いは，すべての話題に関して見られるものではないと思われる．

以上のことから，話題を指導に用いる場合は，以下の点に留意することが必要だと考えられる．その話題が持ち出される目的・状況を複数設定すること，職場の持つ特定の役割傾向だけを反映させないことである．そして，目的・状況の作成に当たっては，この表3が参考になるものと思われる．

次に表3を，各目的を軸に据えて見直す．すると，特定の目的が多く見られることがわかる（表4）．

教委，学校ともに「世間話・息抜き」が一番多い

Akita University

表4　表3の中で多く見られる目的

教　委		学　校	
世間話・息抜き	31	世間話・息抜き	23
ALTの現状や様子の把握	14	ALTの現状や様子の把握	19
有益と思われる情報の提供	10	英語・外国事情の学習	14
さまざまなことがらの連絡	10	有益と思われる情報の提供	13
仕事のスケジュール確認や調整	9	話しかけてALTに居場所を与える	13
ALTへのカウンセリングやケア	8	仕事のスケジュール確認や調整	10

ことからは，職場とはいえ，業務に直接関わらない内容の会話がよくされていることがうかがえる．教委でそれに続いて見られる「ALTの現状や様子の把握」は，世話役の立場から出たものと考えられる．教委の接し方の傾向（グレー部分）は，これを含む以下の目的に反映されていると言えよう．学校の方は上位2つと「話しかけてALTに居場所を与える」以外のものに接し方の傾向（グレー部分）が反映されていると思われる．話題を教材化するときは，これら多く見られる目的を話題に織り込むことを意識すると，実際の状況に近いものが提供できることになるものと思われる．

5.2. 目的をより深く掘り下げると見えること

ここで，共通してみられる話題の一つに注目し，それが用いられる目的や状況を深く掘り下げるとどのようなことがわかるかについて考える．取り上げたのは「自国・日本のこと」である．

この話題を取り上げたのは，どちらの職場でも共通してよもやま話として出されるだけでなく，担当者の所属や仕事などにより出される目的が異なるものになるのではないかと思われたからである．

「自国・日本のこと」を話題にする目的として示した選択肢から，あてはまるものをすべて選んでもらった結果を表5に示す．

教委・学校共に複数の目的が選択されている．そして，共通したものが多く見られる．教育委員会では「世間話・息抜き」への集中が目立つ．それに対し，学校の目的は広く浅く，抜きん出たものがない．「英語・外国事情の学習」が最も多く，それに「世間話・息抜き」と「話しかけてALTに居場所を与える」が続く．「世間話・息抜き」が共通していることは，よもやま話目的が予想通りどちらにも見られることを示している．また，「ALTへのカウンセリングやケア」，「ALTの現状や様子の把握」が学校から挙げられていることは，この話題に関し教委のような接し方が学校で見られることを意味している．

これらの目的について自由記述とインタビューでさらに説明を求めたところ，表6の回答が得られた．「世間話・息抜き」が選択されていたにもかかわらず，それに対応するようなのんびりした詳細は見当たらない．かわりに教育委員会からはALTの生活や文化理解のサポート，相互理解の促進が，学校からは英語教師としての学習や授業での話題利用，

表5「自国・日本のこと」を話題にする目的（複数回答）

教　委	学　校
5　世間話・息抜き	2　世間話・息抜き
2　英語・外国事情の学習	3　英語・外国事情の学習
2　日本語・日本事情の学習支援	1　日本語・日本事情の学習支援
1　有益と思われる情報の提供	1　有益と思われる情報の提供
1　さまざまなことがらの連絡	2　話しかけてALTに居場所を与える
	1　ALTの現状や様子の把握
	1　ALTへのカウンセリングやケア
	1　ALTの仕事の様子を探る

Akita University

表6 「自国・日本のこと」を話題にする目的の詳細（かっこ内は複数回答の数）

教　委	学　校
ALTの旅行にアドバイスするなど	JTE[8]としての学習・情報収集を行う（2）
車の事故，家賃の支払い，日本の食べ物，生徒との立場の違いなどを知ってもらう	授業中にALTまたはJTEが生徒に話す（2）
生活面の相談時に，互いを理解しようとする気持ちを高める	礼儀，適切なことばの選択，文化などに関するALT，JTE双方の学習
文化の違い，どうすればストレスなく暮らせるかなどを伝える	文化的理解，対比による発見
文化的な違いを理解しあったり，人としての考え方を知ったりする	

相互の文化理解が目的の詳細として出されている．これは，教委・学校それぞれの接し方の傾向にほかならない．取り上げた話題が一つであることから一般化するものではないが，これは，他の話題の場合でもそれらが持ち出される目的を深く掘り下げていくと，そこに各職場の接し方の傾向が見いだせる可能性を示唆している．つまり，接し方の傾向に注意を払うことの意義が改めて確認されたことになる．そのため，話題を用いた日本語指導の際は，5.1で述べたように目的を複数想定することに加え，接し方の傾向を目的に反映させることも必要であると言える．このほか，掘り下げたことにより，より具体的なレベルで共通する目的の存在（この例では文化理解）も確認できたが，これは共通の話題一つ一つについて明らかにしていく必要があるものなので，別の機会に考えることにしたい．

これらのことから，教委と学校に共通する話題すべてにおいてALTへの接し方の傾向の違いが見られるとは言いがたい．しかし，話題一つ一つを深く掘り下げて調べないと断言もできないということがわかった．

結論

以上，職場でよく出る話題について調べたところ，次のことが明らかになった．

1 担当者はその所属先によって，ALTとの接し方に特定の傾向を持つ．

2 集められた話題のリストは，シラバスや会話教材作成のリソースとして利用する価値がある．

3 話題を用いた指導の際は，以下の点に留意して，教材や活動を準備・提供することが望ましい．

・その話題が持ち出される目的を複数設定すること．

・目的は職場の役割傾向を反映させたもの，それ以外のものの両方を考えること．

参考・参照資料

（財）自治体国際化協会（2011）「JETプログラム」（2011年12月現在）
http://www.clair.or.jp/j/jetprogram/index.html

佐藤雅彦（2012）「職場でALTに理解が求められる日本語の語句　－教育委員会と学校を対象にしたニーズ調査より－」『秋田大学国際交流センター紀要　第1号』

札野寛子，辻村まち子（2006）「大学生に期待される日本語コミュニケーション能力に関する調査について」『日本語教育の新たな文脈　－学習環境，接触場面，コミュニケーションの多様性－』国立国語研究所編　221-257　アルク

前田綱紀，下山雅也，伊島順子，木谷直之，根津誠（1999）「JET青年の日本語ニーズ　－「JET青年の日本語使用実態調査」より－」『日本語国際センター紀要 第9号』国際交流基金日本語国際センター（2011年12月現在）
http://www.jpf.go.jp/j/urawa/public/kiyou/ky09_09.html#no8_4

The JET Programme Official Homepage of The Japan Exchange and Teaching Programme

[8] 日本人英語教師のこと（Japanese Teacher of English）．

Akita University

「参加人数の詳細」(2011年12月現在)
http://www.jetprogramme.org/documents/stats/2011-2012/2011_JET_Stats_J.pdf

謝辞

この研究は，教育委員会と学校のALTご担当の方々のご協力なしには行うことができなかった．ご多忙な中，アンケートのみならずインタビューにまでご協力くださった皆様に，この場を借りて心より感謝申し上げたい．

Summary

This article looks at common topics that appear in Japanese work environment for ALTs.

The topics collected from supervisors of ALTs at boards of education and schools suggest the following: the supervisors at boards of education tend to act like a manager/counselor of ALTs while at schools, supervisors expect their ALTs to work as their colleagues. These tendencies are recognized by the supervisors of both work environments. And because the topics are accepted as common ones at work, they are useful for teachers of Japanese as their teaching resource, and for supervisors/colleagues of ALTs to show their ALTs what topics appear frequently at work.

When using the topics to teach the language, teachers of Japanese are expected to bring up a number of purposes for which these topics are used. Also, reflecting the tendencies of the supervisors' behaviors mentioned earlier in some of the purposes are necessary.

Key Words : Japanese-Language Pedagogy, ALT (Assistant Language Teacher), Topics, Japanese for Specific Purposes

(Received February 15, 2012)